声を重ねるインタラクションにおける乳児の発声行動

○嶋田（源）容子¹

(¹京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科)

キーワード：乳児，音声，音楽性

Infant vocalization in vocal-overlapping interaction

Yohko M. SHIMADA¹

(¹Graduate School of Asian and African Studies, Kyoto Univ.)

Key Words: infant, vocalization, musicality

目 的

乳児期の音楽への認知については多くの研究がある。しかし、乳児に音楽的な発声が自発する契機については、実証的な研究がほとんどなされていない。

乳児はひとりの時にも快い状態で「声遊び」とも言える発声行動をみせ、その音声には同じフレーズの反復がみられる (Shimada, in press)。この研究では、音を聴くこと自体で遊ぶという、音楽的行動の基本とも言える行動が、5ヶ月の乳児において確かめられた。

では、他者とのインタラクションにおいて、初期の音楽性はどのような時に表出されるのだろうか。成人の文化における音楽の多くは、社会集団の紐帯と深く結びついている (利光, 1990)。複数の人類学的研究が、多人数の人々が互いの声を重ねる形式の集団の歌唱や唱和が、集団での労働や、個人の集団への回帰などと結びついていることを報告している。人間社会で大きな役割を果たしていると考えられる「声を合わせる」行動は、乳児の発達過程においてどのような意味を持つのだろうか。本研究では、乳児と養育者が互いの声を重ね合わせるインタラクションに注目し、実験をおこなった。

方 法

対象：生後 18 ヶ月の乳児とその母親 19 組。

機材：高性能録音機能付きデジタルビデオカメラ 2 台。

手続き：下記の条件による 10～15 分間の自由遊びをおこなった。母親には、両条件とも、歌いかけ等の音楽遊びをしないよう教示した。条件の順序は被験者間でカウンターバランスを取った。

- ・**重複条件：**乳児が発声すると母親がそれに声を重ね、できるだけ多くの声が重複するようにした。

- ・**交替条件：**乳児の発声の前後に、乳児と声が重なることを避けて母親が発声した。

分析：各条件において指定された発声パターンができているか、確認をおこなった。乳児と母親の発声を時系列に書き出し、乳児の発声時間当たりの両者の重複率を算出した。9 組の参加者が両条件を満たした。分析は、この条件を満たしたサンプルのみを対象としておこなった。

- ・**反復（非言語）：**同じ音韻が 2 回以上繰り返される発声。途切れず続く反復の全体を反復 1 とカウント。単語として認識されない発声。

例. ばばばばば、たあたあたあ

- ・**反復（言語）：**上記と同様のカウントで、明確に単語と認識されたもの。

例. わんわん、ないない

- ・その他、**叫び**・**笑い**・**単語**（例. きりん、くっく）

結 果

乳児の発声パターンを、前述の 5 項目について調べた結果、重複条件において非言語的反復が多い傾向がみられた。

考 察

声を重ね合わせる形のインタラクションでは、非言語のフレーズの反復が多く見られた。リズムカルで冗長的な反復は、音楽的な発声の萌芽とみることができのかもしれない。また、この条件では明確な単語の発話がほとんどみられなかった。これまでのデータでは、メロディーやリズムについては十分な結果が得られていない。今後は、音楽的要素の精細な分析が必要である。また、反復的な発声は、リズムカルに椅子を叩く・手を振るといった行動を伴うことが多く、身体運動も合わせたリズムの生起について、さらに分析したい。本実験では 18 ヶ月児による発声の内容を調べたが、同じ月齢で他者の同様の発声形式に対する認知についても確かめなければならない。その上で、発達過程における自発的な音楽性について、さらに考察を深めたい。

引用文献

Shimada, Y. (in press). Infant vocalization when alone: possibility of early sound playing, *International Journal of Behavioral Development*, in press.
利光有紀. (1990). モンゴルのアンダイ舞踏. In 八木祐子 (Ed.), 女性と音楽. 東京: 東京書籍.

謝辞

本研究は科研費若手 S「養育者一子ども相互行為における責任の文化的形成」(代表 高田明)の共同研究の一部として実施されました。また本研究はヤマハ音楽振興会の 2010 年度研究助成を受けました。